

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入居者や事業所の課題解決等にあたる際には、職員全員で事業所理念を確認しながら、入居者の生活支援、日々の業務に取り組んでいるところである。ただし、十分に理念が浸透していない場面もある。	理念については玄関とリビングに掲示し共有と実践に努めている。職員は月1回の職員会議や申し送り時などに理念について話し合い、日々の生活の中で利用者から「笑顔」を引き出し楽しい日々が送れるような支援に取り組んでいる。家族に対しては利用契約時や運営推進会議の席上、理念に沿った支援について説明すると共に利用者の生活の様子を見ていただくようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町内会での役員をさせていただいており、今年度は、福祉推進委員として、子供や高齢者の行事手伝いに参加している。ただし、コロナ過のため、行事がキャンセルになったり、地域の道普請も行われていない状況にある。	区費を納め地域の一人として活動している。昨年度は地域の班長を務め現在は福祉推進員として地域の子供たちの「焼き芋大会」のお手伝いや「お年寄りのお料理教室」のお手伝いに参加し地域との交流を図っている。今年度は新型コロナの影響を受け町主催の行事や地元中学生との交流活動、また、各種ボランティアの受け入れ等全て自粛という状況が続いているが、収束後には積極的に活動を再開する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の影響を受け、地域の人々との接点は大幅に減ってしまった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	本年度は、コロナ禍の影響のため、参集せず書面会議のみでの開催であったため、報告はしているが十分でないこともあり、双方向の意見交換は、必要であると感じている。	家族代表、民生委員、あんしん相談員、地区社協会長、社会保険労務士、市高齢者活躍支援課職員、地域包括支援センター職員、ホーム関係者の出席で2ヶ月に1回開催している。現在は新型コロナの影響を受け書面での開催となり、入居状況・職員状況・ヒヤリハット・活動などの報告、身体拘束適正化委員会の報告、食事関係等を書面にして参加メンバーに郵送でお知らせしご意見を頂いている。昨年春以降集合しての会議ができていない状況が続いているので、次回5月には近くの「生活改善センター」の広い会議室で会議を行う予定になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	職員からコロナウイルスの陽性症状者が出た際に、市高齢者活躍支援課と市保健所とで連携し、感染経緯と現状の報告、連絡、相談をし、対処を講じた。	市高齢者活躍支援課とは新型コロナの感染予防対策や事故報告等で連携を取っている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し行われているが現在は新型コロナの影響を受け急激な体調の変化が見られない限り延長となっている。また、あんしん(介護)相談員の来訪も中止という状況が続いているが収束後には再開を予定している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全体で身体拘束をしない介護の実践を深めるため、職員会議等を通じて理解に取り組んでいる。本年度は身体的拘束は行われていない。	身体拘束を必要とする利用者もなく、拘束のない支援に取り組んでいる。弱い離脱傾向のある方がいるが玄関前まで話をして対応している。玄関は日中開錠されている。また、職員はホールに必ず1名は居るよう心掛け、きめ細かな所在確認を行い安全の確保に繋げている。合わせて「ダメ」「座ってて」といった言葉は使わないよう徹底し、他の言葉に言い換えるようにしている。転倒危惧のある利用者が若干名おり、家族と相談をしセンサーマットを使用している。2ヶ月に1回運営推進会議に合わせ身体拘束適正化委員会を開き、拘束に対する意識を高め支援に当たっている。	

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「ダメ」「座ってて」「そちらに行かないください」等のスピーチロックと見受けられる場面も少なくなってきたもののゼロではない。尊厳保持の観点からスタッフ全員で支援に取り組んでいきたい。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に日常生活支援事業、生活保護の制度を利用し、入所している利用者が三名居る。実際の生活を通して、関係者と連携を取りながら支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	運営事項説明、重要事項説明、契約の説明は時間をかけて、納得の上契約書にサインをしてもらっている。疑義が生じた際には、疑義が解消されるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	本年度は、コロナ禍の影響のため、参集せず書面会議のみでの開催であったが、ご意見の募集に関しては、多くのご意見をいただけた参集形式よりも意見をだしやすいのではと思われる。	意思表示の難しい利用者が半数弱おり、家族の来訪時に声掛けをして頂いたり、入居前の家族からお聞きした情報を基に話しかけ手を握って思いを受け止めるようにしている。家族との面会はコロナ禍という状況下、玄関ホールのみでの面会としており、足りない物の補充や誕生日のプレゼント等を持参されている。また、例年であれば、年1回、夕べの集いとして「家族会」を実施し、居室の掃除に合わせ炊き出し訓練として「カレー」を作ったりして食事会を兼ね交流を深めている。利用者のホームでの様子は月1回発行されるお便り「福だより」でお知らせしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	小さな組織体としての運営体制づくりの利点として、職員からの意見や提案は受けることはよくあり、それらの意見を検討、討議のうえ、実践、反映につなげる様にしている。	月1回、全職員が集まり易い時を選び職員会議を行っている。利用者一人ひとりについてのカンファレンス、職員間での話し合い、各種研修等を行っている。その中で職員の提案に対しては、まずやってみることに心掛けている。人事考課制度があり目標を立てそれに対し自己評価を行い、理事長による個人面談も行われスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与規定で資格、研修履修に応じたキャリアアップを明確にしている。常勤、非常勤に関わらず、就業条件も個々の相談に応じて条件整備を図っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため、外部研修の機会が減ったため、事業所内で集団、あるいは個人での指導や勉強の機会を設けている。介護関連資格取得も奨励している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡会に所属し、交流を重ねている。		

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所間もない入居者には、職員全体で気にかけて、困ったことや不安を把握し、対応するようにしている。特に初期における信頼関係の構築は重要であることを日々職員に伝えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期の段階では、些細な事もご家族に報告、相談やお願い事を頼んだりする過程で、自ずと相互理解が芽生えるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅支援とホーム内支援では、生活環境が大きく変化するため、本人への面談のうえ、生活や医療の状況の勘案、家族にもよく話しを聞いたうえで、サービス利用の初期については、慎重な対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホームでの日常は、本人の暮らしの場そのものであるとの考えのもと、職員にとっては一日のうちの少なからぬ時間を過ごす場を共に過ごすという意味においては、まさに家族のような関係性が持てるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人、家族、事業所、かかりつけ医それぞれがそれぞれの立場で三人四脚でケアをしていくあり方を常に示し、それぞれの状況に応じて協力しあい、過重負担とならないよう配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	一部の入居者ではあるが、葉書や年賀状、面会の機会を設けるように努めているが、コロナ禍の中、厳しい状況である。	新型コロナの影響を受け知人や友人の来訪が少なくなっているが、利用者の中には在宅時から信仰心の厚い方がおり家族より連絡を頂いている友人が「会報」を定期的に届けに来訪している。また、家族と電話や葉書のやり取りをされている方も数名いる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者間には細心の注意を払っている。また、入居者間で良い関係が築けるように職員の支援が重要であることをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本年度に、看取りによるサービス終了者が2人居たが、看取り中、看取り後の本人、家族へのフォローに努めた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の過ごし方から、洋服の選択や施設内での家事手伝いや畑仕事等、自己実現につながるものをもっと把握できるように、職員全体で考え方を共有して努めていくべきであると考えている。	日々の洋服選びや好みの飲み物等、二者択一の提案を含め答えられるように問い掛けをすることで意向に沿うようにしている。被害妄想の強い方がいるが日々の言動には特に配慮し最初のSOSに気づいてフォローするよう心掛けている。また、日々の気づいた言動等は個人記録に纏め、申し送りで情報を共有し利用者の希望に沿えるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に本人、家族からこれまでの暮らしを聞き取るようにしている。また、入居後も本人の発言や家族の思い出話などを聞いて、本人理解に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	9名の方それぞれの情報を職員が、必要に応じて本人に確認することで入居者一人ひとりの理解につなげている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護職員だけでなく、調理職員、事務局員、用務職員の全職員との情報共有、意見を反映させて介護計画を作成している。	職員は2~3名の利用者を担当し、足りない物の補充をしたり、日々の状況を把握しモニタリングを行っている。職員会議に合わせカンファレンスを行い家族からお聞きした希望も加味しプランの作成を行っている。入居時は3ヶ月間様子を見て、その後、短期目標6ヶ月、長期目標1年でプランを作成し、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い、利用者一人ひとりに合った支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日中、夜間の様子を支援経過として記録し、職員と計画作成担当で情報を共有し、介護の実践や介護計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームは、入居者の暮らしそのものである。外出や趣味、また心のケアを含め、既存のサービスを超えて、入居者の生活が豊かになるように対応したいと努力している。		

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支えている地域資源は、現段階では多くを把握できている訳ではないが、地域資源の協働は豊かなサービスのためには不可欠であると考えているので、地域資源の掘り起こしに力を入れていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医自身が認知症治療に特化し取り組んでいただいております、ホーム、家族とも良好な連携が取れている。	当ホームは引き続き認知症ケア「コウノメソッド」に取り組んでいる。現在全利用者がホーム協力医の月2回の往診で対応している。また、協力医の看護師ともオンコールでの連携を取ることができ、利用者の健康管理に万全を期している。歯科については必要に応じ協力歯科への受診で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は、看護職員に入居者の状況を伝え相談することで、適切な受診や看護に結び付きやすくなった。また、看護職を通じて、かかりつけ医の訪問看護師とも良好な連携が取れており、適切な看護支援、連携がとれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した際には、介護職員や介護支援専門員が入院状況の把握や退院に向けての情報交換に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所開設9年が過ぎて、看取り介護(最終は病院を含む。)も行ってきている。しかし、看取りの支援には、職員全体で学ぶべきものが多く、その課題の重要性を感じている。	重度化や終末期に対する取り組みについては利用契約時に説明を行い、家族の意向を確認の上意向確認書を頂いている。終末期に到った時には家族、医師、看護師、ホームで話し合いの場を持ち、改めて同意を頂き医療行為を必要としない看取り支援に取り組んでいる。職員は良いお見送りが出来るようその都度話し合い、本人や家族に寄り添い看取り介護に取り組んでいる。また、看取り後は職員会議で振り返りの機会を持ち、心の籠った支援に繋げるよう話し合っている。開設以来延べ20数名の方の看取りを行い、希望する家族には最後の数日間は泊まっていたいただき最期の時を共にしていただいております、感謝の言葉を頂いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	地震や火災、停電、水害等も考慮して総合訓練を年二回実施している。		

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害に必要な物品の整備や利用方法、避難方法や避難後の行動マニュアルの整備を進めているところである。	今年度は新型コロナの影響を受け6月と11月に内部のみで防災訓練を行った。水消火器を使っての消火訓練、合わせて火災、地震想定避難訓練をホームの周りの空き地まで移動して実施した。また、防災機器の確認とスマートフォンのLINEを用い緊急連絡網の確認訓練も行っている。LINEを使つての連絡網は家族に対しても広げて行く予定である。備蓄として「お米」「水」「レトルト食品」、備品として「ガスコンロ」「石油ストーブ」「懐中電灯」等が準備されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「一人ひとりの人格の尊重とプライバシー保護」は、サービス提供の基本と考えている。職員全体が理解して対応しているとはいえないが、「入居者の人格の尊重」について、職員間で理解に努めている。	利用者一人ひとりの状況に合わせた係わりに気配りするようにしている。一人ひとりの力量に合わせ居室に物が沢山置かれていたり落ち着かない利用者もいることから居室内の物品配置にも気を付けている。居室内のプライバシーに配慮し入り口には「のれん」を掛けている。また、男性利用者の居室はホーム玄関近くに配置し、トイレも男性、女性、それぞれ使用するトイレを分けている。新入職員に対しては利用者や信頼関係を築けるよう土地の言葉も交えながら親しみを込め接するよう指導している。呼び掛けは苗字、名前に「さん」を付けお呼びしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が何らかの希望を表出した場合には、上手く表現できない事が往々にしてあるので、本人の希望を具体的にするため、本人の発言に耳を傾けている。自ら希望が出ない場合にも、選択肢を提案し自己決定を促すように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員や事業所の都合を優先させる日常生活ペースが往々にある。一人ひとりのその日の希望を聞き取り、支援していけるように努めたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族に洋服等の買い物や差し入れを積極的にお願している。家族にお願しているのは、触れ合いとしての側面を期待している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事時は準備、調理、片付けの手伝い等にご本人の出来るなりに関与できるよう支援している。普段の会話においても、食べ物のお話することで本人の嗜好が掴めるよう努めていたが、本年度はコロナ対策もあり、本人関与の部分は縮小している。	自力で摂取できる方が半数強、介助が必要な方が数名という状況である。アクリルパーテーションを用い新型コロナ対策を取り、職員と共に話を楽しみながらの食事の時間を過ごしている。献立は調理職員が利用者の希望も聞きながら冷蔵庫の中の食材を使い、作り立ての温かい料理を提供している。正月、ひな祭り、お盆等の年間行事には「旬」の食材を用い季節感を味わっていただくようにしている。また、おやつには利用者の大好きなおやき、こねつけ、にら煎餅等の郷土食を作り楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	主菜、副菜の盛付量は、体調も考慮し一人ひとりに応じて適切な量で摂取してもらっている。水分量についても同様である。		

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立の方、見守りの方、一部介助の方それぞれに応じて、声掛けや入れ歯の汚れ、口腔内の汚れのチェックを確認しケアしている。一日の流れの中に口腔体操も取り入れている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄状況に応じて、日常の排泄習慣の観察から不安を取り除く支援をすることで排泄の自立に繋げている。	自立している方と全介助の方がそれぞれ若干名ずつおり、一部介助の方が半数弱となっている。職員は利用者の排泄パターンを把握しており、起床時や食事前の定時の声掛けと合わせ一人ひとりの状態に合わせ声掛けを行い気持ち良く過ごしていただくよう取り組んでいる。時間、量、排便状況については介護記録に残し、情報を共有化している。排便コントロールをされている方が三分の一いるが、麦茶を中心に甘い飲み物、乳製品等の水分摂取を進め排便促進を図っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便スケジュールを把握し、ご本人にあわせて水分補給や運動を働きかけ、かかりつけ医とも相談しながら、内服薬の他、プルーンやオリゴ糖も使用するなどして生活習慣からも便秘予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日や時間帯は予めスケジュールはあるが、なるべく個々人の希望やタイミングに合わせるため、入浴順序、スケジュールは柔軟に変更できるようにして支援をしている。	全利用者が何らかの介助を必要としている状況である。入浴拒否の方はなく、週2回の入浴を職員と話をしながら楽しんで入浴している。入浴後はスポーツドリンクなどを笑顔で浮かべながら飲んでいるという。入浴剤を使用したり、季節に合わせて「ゆず湯」「菖蒲湯」「リンゴ湯」を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	施設の一日の流れはを理解している入居者もいる。集団でいたい人とそうで無い人もいて、それぞれのペースで過ごせるよう休息、睡眠が取れるよう、食事やお茶の時間をずらしたりする等して対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ医自身が認知症状に関する薬に関しては施設天秤法を推奨しており、本人の様子、症状に合わせて本人の症状にあった服薬支援を医師と連携して行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホーム内での家事手伝い、散歩時のリーダー的役割、談話時のムードメーカー等その人にあった役割を活かせるよう支援を行って笑顔や生きがいを引き出すよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	例え玄関の前であっても、外に出られるように努めている。本人が場所や目的が明確になっている場合には、意向に沿った支援を家族と協力を取り支援している。また、地域で旅行イベントにも参加させてもらっているが、本年度は、コロナ禍のため外出支援は難しくなった。	外出時、自立歩行の方が三分の一、車いす使用の方三分の二という状況である。天気の良い日にはホームの周りを散歩したり、玄関先に出て外気浴を楽しんでいる。新型コロナウイルスの状況が続き外出レクリエーションが難しい状況であるが少人数に分かれドライブを兼ねお花見に出かけたり、安曇野松川の「安曇野ちひろ美術館」まで出掛けお昼にはサンドウィッチを楽しみ、帰りには道の駅に立ち寄りアイスクリームを食べ利用者も楽しい一日を過ごしたという。新型コロナウイルス収束後には積極的に外出計画を立て出掛ける予定である。	

グループホーム福わらい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居に際して現金を所持をしないことが原則となっているが、現金の所持や買物の機会を本人の希望を踏まえ、家族と相談しながら、支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の状況に応じて電話をする機会を支援している。手紙のやり取りについても、葉書や便箋の購入なども含めて支援を実践している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	畳のあるスペースを用意し、一般住宅がそうであるように明るすぎない、過度にバリアフリーでない、季節ごとに花を置く、テレビやラジオ、会話等の音があり、食堂(居間)に人が寄れる環境作りに努めている。	共用スペースに置かれた食事テーブルにはアクリルパーテーションが設置され新型コロナ対策が取られている。廊下の壁一面に毎月テーマを決め制作している利用者の「貼り絵」作品が多数飾られ活動の様子が窺える。また、小上がりの畳スペースには季節の飾り付けがされており、現在はお雑様が陳列され、季節を感じながら日々の生活を送っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者の様子を観察しながら、共用の空間が、感覚的に居心地が良くなっているかを確認している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室での過ごし方や過ごす時間に応じて居心地よく過ごせるように本人の要望を聞いたり、一緒に掃除をするなどして工夫をしている。また、馴染みの家具やテレビを置いている入居者もいる。	洗面台とクローゼットが備え付けられた居室は整理整頓が行き届き綺麗な中で生活をしている。入り口ドアには「すりガラス」と「透明ガラス」の2枚が付けられているため「のれん」が掛けられプライバシーに配慮されている。持ち込みは自由で、家族と相談し使い慣れた家具、テレビ等でレイアウトし、壁には家族の写真等も貼られ自由な生活を送っていることを垣間見ることができた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	見当識障害がある利用者には、トイレやフロアが近い居室にするなどの配慮や誘導の声かけもその人に応じた声かけをする配慮などをしている。		